

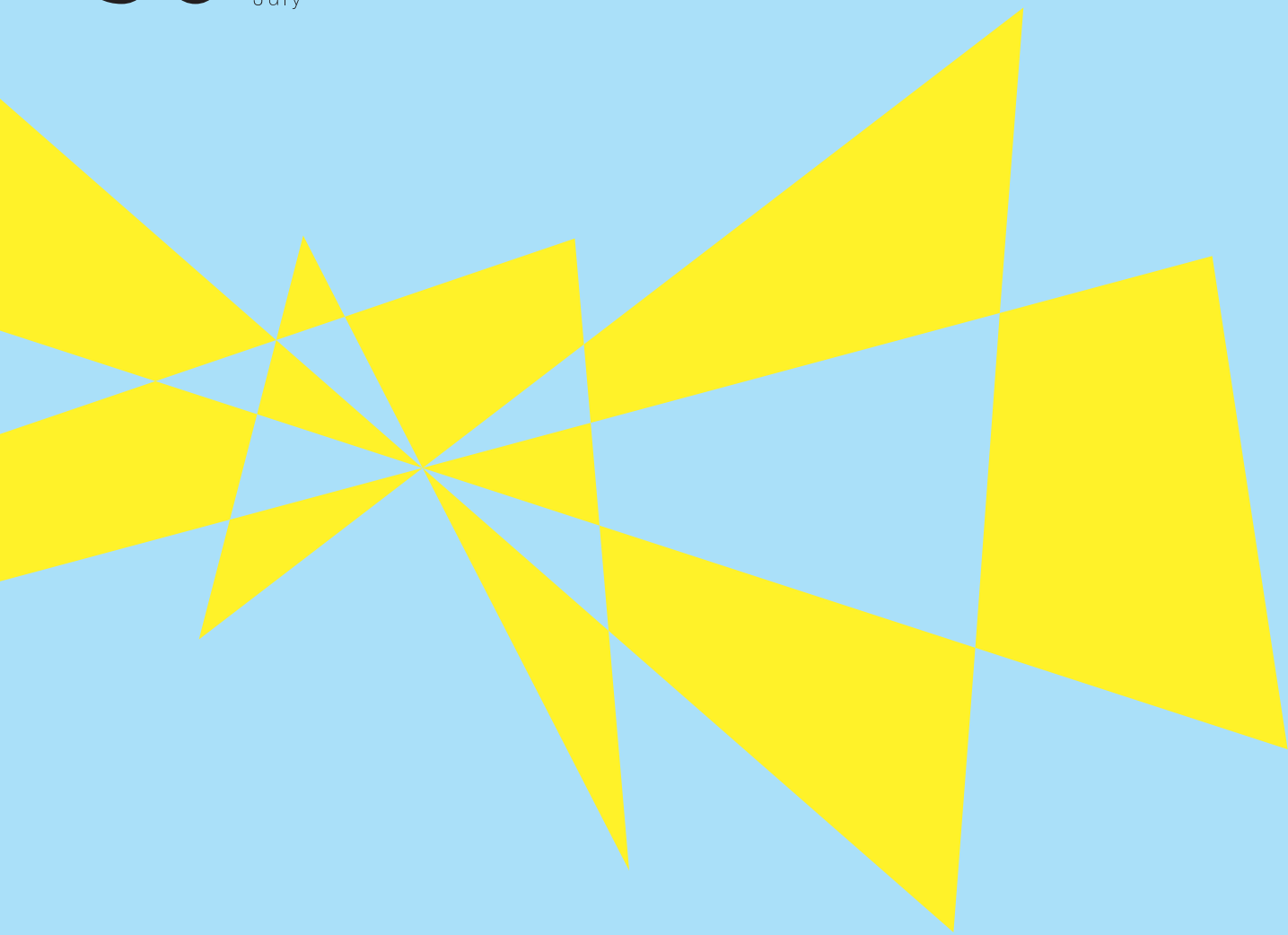
| 三重大学 広報誌 |



WAVE MIE UNIV.

MIE
UNIVERSITY
NEWSLETTER

38 2008
7
July



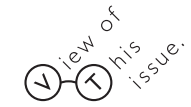
| 特集 |

地域とともに生きる

CONTENTS

【特集】
地域とともに生きる

[View of This issue]		
地域とともに生きる	01	
● 理事・副学長 東 晋次		
[特集 / 対談]		
地域とともに生きる	02-07	
● 三重県知事 野呂昭彦		
● 学長 豊田長康		
司会 理事・副学長 東 晋次		
[RESEARCH FRONT 1]		
物事の複雑な関係性を探り、 自明視された文化を追究する。	08-09	
● 人文学部准教授 森 正人		
[RESEARCH FRONT 2]		
ワーキングメモリとの関連を解明し、 テキスト理解のモデル化を目指す。	10-11	
● 教育学部准教授 滝口圭子		
[RESEARCH FRONT 3]		
世界を視野に、人間と共生する 次世代メカトロ研究を推進。	12-13	
● 大学院工学研究科教授 平井淳之		
[RESEARCH FRONT 4]		
治水や災害予測に貢献する、 降水量の算定に挑み続けて。	14-15	
● 大学院生物資源学研究科教授 葛葉泰久		
[連載 CHRONICLE OF MIE VOL.2 文学編]		
戦争を描いた小説家、 田村泰次郎。	16-17	
● 人文学部教授 尾西康充		
[連載 CHRONICLE OF MIE VOL.2 美術編]		
「黄蜀葵 (とろろあおい) に 翡翠 (かわせみ) 図」	18-19	
● 教育学部教授 山口 泰弘		
[三重大学の目指す社会連携②]		
三重大学キャンパス・インキュベータ 三重大学発ベンチャーと 産学連携によるチャレンジを支援。	20	
[TOPICS]	21-24	
三重大学の研究と研究活動を通じた社会との連携 日本結晶成長学会第24回論文賞 日本外科学会研究奨励賞 30周年記念風力エネルギー利用シンポジウム「論文ポスター賞」 30周年記念風力エネルギー利用シンポジウム「論文ポスター賞」 「輝かしい今年の梨花人」賞 セメント協会論文賞 日本熱帯農業学会学術賞 Alcon Japan Clinical Award 新自由主義改革と日本経済 循環型社会の構築と農業経営		
2008年1月～5月 三重大学の主な出来事	24	



地域とともに生きる

理事・副学長(企画・評価担当)
東 晋次

三重大学の基本的な目標は、“地域に根ざし、世界に誇れる
独自性豊かな教育・研究成果を生み出す”である。それは地
域という土壌の中で自ら種子となり、根をはりながら花果をもた
らすことである。大学が、地域に潜む学問や教育上の課題を
発見してそれに取り組み、その成果は地域の人々によって享
受される。一般にこれを「地域に貢献する」と称している。

しかし、「地域貢献」と言うと、大学が未だ地域の外側に在る
関係を暗黙裡に含んでいるように観ぜられる。大学が自らを支
えてくれる地域と共に歩み、大学の在り方そのものが地域社
会の目指す方向に合致する、大学が地域に内在する、という
ころまで行かないと、真の意味で地域に根ざしたことにはなら
ないのではなかろうか。これは難しいけれども、地域圏大学の
将来の在り方として、心すべき方向性のように思える。

本来、学問とは現実の具体的な問題から出発し、理論化や普
遍化を経て、現実的課題の解決に向かって実践するものであ
る。「人間は何のために如何に生きるべきか」という問いに対
して哲学や倫理学があり、病気や身心の苦痛から解放されたい
という切実な願いから医学や看護学が生まれる。大学全体
がその学問や教育を以て、現代日本の地域をとりまく深刻な諸
問題に向き合い、その蘇生を図り、新たな地域社会の創造に
向かって実践することが今こそ求められている。

知事と学長との対談を聞きながら心に抱いたのは、「三重大
学が“地域に根ざす”ことを標榜するのであれば、その役割を
先陣をきって担う教育研究組織の拡充や改革が必要であろう」
という想いであった。

ひがししんじ
歴史学博士
専門分野は、中国古代史



◎特集／対談

地域とともに生きる

三重県知事 野呂昭彦 + 学長 豊田長康

三重大学講堂（三翠ホール）

三重大学は地域圏大学として、三重県のさらなる発展への貢献を目指し

自治体や地元企業との連携を積極的に図っています。

今回は野呂昭彦三重県知事をお招きし、「地域とともに生きる」というテーマで

人材育成や今後の連携のあり方について学長と語り合っていました。

◎司会・進行
東 晋次
ひがししんじ
理事・副学長（企画・評価担当）
歴史学博士
専門分野は、中国古代史

好調な経済があらわす 三重県の潜在能力

司会 本日はお越しいただきありがとうございます。三重大学は三重県唯一の国立大学として、県と協力していろいろな活動を展開しておりますが、本日は知事から大学に対し、さまざまなご意見をいただければと思います。まず、県政の現状についてお話しただけですか。

野呂 現在、グローバル化が進展し、三重県、三重県民も毎日の生活が世界情勢に大きく影響される時代となっています。一方で、日本は人口減少社会に突入し、これまでの価値観や社会構造に基づく制度が合わなくなるなど、大変革が求められています。国、自治体を取り巻く環境は厳しいものがありますが、その中でも三重県は産業経済がとても活発で元気です。私が知事になった2003年以降を見ても、2003年から2006年の4か年で三重県の製造品出荷額は約40%も増加し、その間の実質経済成長率は全都道府県の中でナンバーワンを誇っています。また、2007年の観光入込客は前年比3.2%増の3,397万人となり、実質的に平成6年に次ぐ高い数値を記録し、有効求人倍率も全国で常に上位を維持しています。まだ県民が経済の好調さを実感できるほど充分ではないかもしれませんが、他県と比べれば、まるで中国のような活況を呈しているわけです。この元気をこれからも継続していかなければなりませんから、三重県は今、産業政策の面でも三重大学をはじめとする大学や研究機関、民間企業などと連携しながら知識集約型産業構造への転換を図っています。また、社会が成熟化する中で、三重県でも県民はこれまでのような物の豊かさ、経済の

発展だけではなく、生きがいや暮らしのうるおいを強く求めるようになっていきます。今後は経済面だけではなく、古来から「^{うま}美し国」と讃えられてきた三重の自然や歴史文化などの財産を生かしながら、本当に県民の生き方を高められるような取り組みが必要です。そこで三重県では人を元気にし、互いを高め合う文化の力に着目し、文化力をベースにすべての政策を見直そうと、質の行政改革を進めています。文化政策の象徴的なものとしては、新しい博物館を作ろうという計画があり、三重大学や地域の文化施設、図書館なども連携した、文化と知的探求の拠点を整備していきたいと考えています。

豊田 国立大学は法人化後、より自立的な運営が求められるようになり、三重大学は地域貢献を旗印にさまざまな取り組みを進めてきました。結果、企業との共同研究数は240～250件で全国13位、中小企業との共同研究数では3位にランクし、大学の規模からすると、産学連携についてはかなり高い実績を挙げていると自負しています。また、今、三重県の経済が好調ということで大変うれしく思っているわけですが、南北格差の問題などもあり、三重大学では三重県の南部地域とさまざまな取り組みを行っています。三重県立熊野古道センターでは人文学部が中心になって共同研究を進めていますし、尾鷲の海洋深層水も三重大学との共同研究で生まれたものです。今後も多方面で地域の問題の解決に協力させていただきたいと考えています。そして、文化力を高める政策、知識集約型産業構造への転換につきましても、まさに大学が貢献できる分野であり、県の政策には非常に共感を覚えます。今後も、県と一致協力して地域貢献に取り組んでいくつもりです。

野呂 実は日本経済研究センターの2008年年頭のデータによると、三重県の潜在成長率は全国で3位なんです。1位は滋賀県、2位は東京都、4位は愛知県、5位は沖縄県という順番ですが、東京以外の滋賀や沖縄は将来まだ人口が増えて、労働力が潜在的にあるのではないかとという点で評価が高い。一方で、三重県は人口が減っていく県に推定されているのに、その中で何が評価されているのかというと、技術と資本です。三重県には自動車産業や電機産業を中心に、川上から川下までトータルで技術が集積し、IT関連産業の集積も今、急速に進んでいます。こういった強みを生かしながら将来に向けてより持続的に発展していくためには、持てる技術をどう展開していくのか、展開を図るためにどう人材を育成していくのが重要です。これらの見通しがしっかりしていれば、必然的に資本も三重県に集まってくる。その意味では、私はこれからも三重大学との連携がうまく展開できれば、三重県の潜在成長率は実質ナンバーワンになると思っています。

地域の持続的な発展を担う イノベーション人材の育成

司会 持続的な発展には人材育成が重要とのことですが、今後の展望についてお話しただけですか。

豊田 三重大学では、「地域イノベーション学研究科」という新しい大学院の設置を計画しています。文部科学省に申請し認められれば、2009年春に修士課程、博士課程を同時に開設する予定です。従来の日本の大学院は極めて専門的な研究能力の育成に主眼を置いてきたため、博士課程修了の



豊田長康 とよだながやす
 学長 医学博士
 専門分野は、産科婦人科学・周産期医学・生殖内分泌代謝学



野呂昭彦 のろあきひこ
 三重県知事
 三重県松阪市出身。慶應義塾大学大学院修士課程修了。
 衆議院議員、厚生政務次官、松阪市長を経て、2003年より現職。

「地域に根ざす三重大学と、持続する地域づくりを目指す三重県の連携は、必ずや重要な成果を生みだすでしょう」

学生を企業が採用できない、採用率が低いという問題が起っています。この地域イノベーション学研究科では、地域や社会に求められる大学院生を育成するために、従来の研究開発能力に加えて、製品開発から販売まで一貫してプロジェクトをマネジメントできる人材、実践的な研究開発マネジメント能力のある人材の育成を目標としています。研究開発能力のある教員に指導いただくと同時に、プロジェクトマネジメント能力を養成する教員を新たに外部から招き、学生には双方の能力を身につけさせたいと考えています。同じコンセプトの教育プログラムとして、医学系研究科にバイオ・メディカル創業プログラムがあります。これは地域の方々から好感触を得ていて、中堅企業の幹部、社長自らが希望して大学院に入るということまで起こっています。それを参考に今度は全学的な大学院に拡大し、この地域の、特に中堅企業のイノベーションを促進できる人材を供給していきたいと考えています。

野呂 地域イノベーション学研究科については、三重県もおおいに期待しています。こ

れから地域が持続的に活力を維持していくには、プロジェクトマネジメントができる研究開発人材の育成が欠かせません。三重大学がその中心になって人材輩出に取り組んでいただけるのは、県にとっても大変ありがたいことだと感じています。また、県の「高度部材イノベーションセンター」では、現在、三重大学と連携して「技術者育成講座」を開講しています。三重県の将来を考え、電気・電子工学、機械工学、メカトロニクスといった領域の専門的学問、環境配慮工学や実践品質管理工学、コストダウン技術、生産管理工学などのカリキュラムを体系化したプログラムを実施し、専門的な人材を育成していこうというのが狙いです。そのほか「都市エリア産学官連携促進事業（発展型）」に採択されたプログラム（※1）の目的は、大学の研究成果を活用した新技術シーズを生み出し、産学官連携基盤の構築を目指すものですが、新しい技術の研究と同時に人材育成を非常に重視しています。ここでも三重大学には指導的な役割をお願いしたいと思います。

社会ニーズに応える 先進的な教育の取り組み

司会 地域に貢献できる人材を輩出するために、大学には現状の教育の改革も求められていますね。

豊田 三重大学では、これまでも医学部では医師や看護師、教育学部では教員、工学部ではものづくり人材、生物資源学部では地域の第一次産業をリードする人材を育成し、また人文学部はまさに文化力を支える人材を輩出してきました。こうした従来の教育も特色あるものですが、さらに社会ニーズに応えるために、PBL（プロブレム・ベースド・ラーニングあるいはプロジェクト・ベースド・ラーニング）教育（※2）を取り入れたり、学生が主体となって環境ISO14001の認証を取得したりと、非常に実践的、体験的な教育を始めています。また、PBL教育にeラーニングを加え、ソーシャルネットワークサービスなどのICTを活用し、学生と先生、学生同士のコミュニケーションを促進しています。また、国際化戦略として現在、教育学部と中

「三重県は、日本の中でも、最も未来へ向けて明るい希望の持てる県ではないかと、感じております」

国の天津師範大学とでダブルディグリープログラム（※3）を始めたほか、日本語教育コースも設置し、日本語や日本の文化社会にも精通した優秀な人材を育成しようとしています。三重県の企業などが海外展開しようというときに、必ず求められる人材になると、確信しております。

野呂 今、三重県では、ものづくりを理解するために大学生が地元企業を訪問する取り組みを考えており、三重大学の学生の皆さんにも積極的にご参加いただきたいと考えています。三重県内には素晴らしい中小企業があるので、ものづくりの魅力を体感してもらいたいですし、三重大学には全国から学生が集まっていますから、そうした人材に引き続き三重県に留まってくれたためにも重要なことだと考えています。

豊田 もう一つ、三重大学は女性研究者の育成にも力を入れています。文部科学省の女性研究者支援モデルプログラムに採択された「パールの輝きで、理系女性が三重を元気に」では、理系の女性を育てようと県内の幾つかの高等教育機関と協力して、

女子中高生の皆さんに理系に興味を持っていただけるような取り組みを進めていく予定です。

密なコミュニケーションが 新しい連携を生む

司会 産学官連携に関し、自治体、大学それぞれのお考えをお聞かせください。

野呂 三重県は全国の大学や研究機関、あるいは海外の研究機関とも連携を進めていますが、やはり地元の機能拠点である三重大学には一番大きな役割を果たしていただくことが、三重県の将来の成長につながると思います。産業政策における三重大学との連携では「高度部材イノベーションセンター」の活動をはじめ、三重大学が津市と取り組むメカトロロボットの研究についても、県も一緒に展開を図っていくつもりです。また、熊野古道の活用や教育分野でも連携事業を展開していますし、医師不足に対応するために県の寄附講座を医学部に設けていただきました。過疎地域あるいは人口減少の

問題、農業や水産、林業といった一次産業も含め、今後あらゆる面で県民生活に直結する課題の解決のために、三重大学との連携が必要になってくると思います。

豊田 熊野古道のお話が出ましたが、三重県の多くの市町に三重大学の先生が出向き、いろいろな地域計画に関与しています。産学官連携と言うとどうしても理系をイメージしがちですが、実は文系の先生方も真の意味で地域に貢献していただいています。その点でも三重大学の活動をきちんと評価していただき、大変うれしく思います。法人化後、知事には県と大学のコミュニケーションを積極的に図っていただいています。今後さらにもいい関係づくりを大学としても進めていきたいと考えています。

三重の独自性を発揮した 全国トップレベルの産学官連携

司会 三重県ならではの産学官連携の特長という点ではいかがでしょうか。

野呂 三重県の産学官連携の好例が、「み

えメディカルバレー」(※4)です。平成18年度の「日経バイオビジネス第3回バイオクラスターランキング」では全国4位の高い評価を得ています。中核になるようなハードの施設がない中で何が評価を受けているのかと言えば、これは三重大学との連携の中で治験ネットワークを構築できたことが大きく、しかも、その後の運営状況も成功しています。

豊田 みえメディカルバレーの治験ネットワークは、非常によく機能しておりまして、おそらく治験の件数、実績は全国でトップファイブに入っているのではないのでしょうか。それは大学だけで治験を行うのではなく、地域のすべての病院、多くの開業医の方々のご協力のもとに進めているからで、有機的なネットワークをつくったのが一つの成功の秘訣であると思っています。これはメディカルバレーだけに限らず、地元の中小企業も巻き込んだ産学官ネットワークの形成、それによる連携は、例えば大企業の誘致に比べれば非常に地味ですが、今後の三重県の持続的な発展は、中堅企業の成長なくしてあり得ません。こうした考えのもと、三重大学では四日市フロント(※5)のほか、伊賀にも産学官連携拠点をつくら

うとしています。中には学内でどんと構えていたらいという大学もあろうかと思いますが、三重大学はそうではなく、もっと現場に密着した連携が必要なのではないかと考えているわけです。いわば産学官連携のコンビニ戦略によって、より一層の効果が出てくるはず、と予想しています。

野呂 三重県では「新しい時代の公」と呼んでおりますが、県民あるいは大学、企業なども県政のパートナーであり一緒に公を担ってこう、という呼びかけをしています。三重大学においても、大学のパートナーとして地域をとらえ、学内に閉じこめるのではなく対等な関係を持ちながら展開しておられるのでしょうか。私も、大学がいろいろな形で地域に直接出て連携を図ることで、新しい成果につながるものと期待しております。

常にみずみずしい 美し国 三重をともに築く

司会 最後に、県が進めている「美し国おこし・三重」(※6)に関し、今後の取り組み、大学と県がどのような連携が可能なのか、

お考えをお聞かせ願えますか。

野呂 三重県では、「文化力」に基づく政策を「新しい時代の公」にふさわしい進め方で展開する「質の行政改革」を進めています。その先導的な取り組みである「美し国おこし・三重」は、“人と人、人と地域、人と自然の“絆”を紡ぎ上げ、神話や伝説に語り継がれるにふさわしい「美し国 三重」をつくる”を基本理念とし、「文化力」を生かした持続する地域づくり”をコンセプトとしています。県民にとって一番大切な人生の舞台である「美し国 三重」を磨き、もっと魅力ある地域にするために地域資源を活用して取り組む地域づくりを基本に、2009年から6年間にわたり、県内全域で多彩なイベントを開催する予定です。伊勢神宮で20年毎に行われる式年遷宮は、いつも若々しく生まれ変わるといふ“常若”の考え方を象徴するものですが、「美し国おこし・三重」によって常にみずみずしい常若の三重をつくりたいと考えています。また、イベントと言っても旧来の囲い込み型ではなく、町そのものがイベントの舞台という形で展開します。三重大学の先生方には、現在策定中の基本計画にも参画いただいておりますし、県ではこの地域づくりを地域経済、コミュニティービジネスへの展開に結びつけることも考えていますので、大学の支援や助言がますます大事になってくるでしょう。地域づくりに対する産学官連携において、大学に対する期待は大変に高まっております。

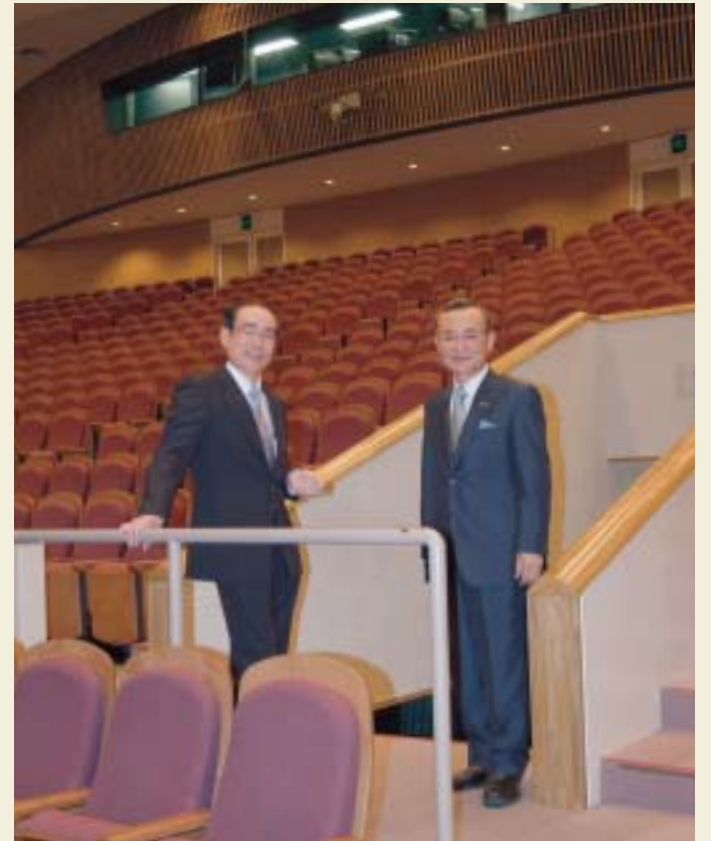
豊田 「美し国おこし・三重」のポイントは、まさに舞台づくりであり、地域づくり。イベントが終わっても、そこでつくられた舞台、地域はずっと続いていくものでないといけないということですね。それには地域のコミュニケーション、コミュニティーづくりが重要です。例えば、それを助ける一つのツールとして、情報分野の先生方を中心にソーシャルネットワークサービスを最大限活用する方策を提案するなど、大学はいろいろなご協力ができると思います。また、三重大学の学生がISO14001の取得に必死になって取り組んでくれたよう

に、今の若い人もうまく誘導すれば地域に溶け込み、三重県の価値を再発見するはずですから、やはり若い人に魅力のある美し国づくりが大切ではないでしょうか。

野呂 そうですね。そういう熱い思いを持った人たちを発掘していくことが第一歩です。今、少しずつ始めていますが、各地域で座談会を持ち、地域のキーパーソンの思いを高めていけば、その中から地域毎にさまざまなテーマが出てくるでしょう。その一つひとつをきちんと成果に結びつけていくために、いろんな観点から大学に指導してもらい、一緒になって取り組んでもらうことがあろうかと思えます。私は知事としてこの三重県を見ますときに、日本の中でも、最も未来へ向けて明るい希望の持てる県ではないか、みんなの思いを集約していけば、必ず成果を出せる県ではないか、と感じております。先日、ドイツの州政府の方々や企業の方々に、三重県と連携すればWinWinの関係が構築できると申しあげたんですが、三重大学もぜひ三重県とともに、県内の地域あるいは県外の方々とWinWinの関係づくりを目指していきたいです。

豊田 ありがとうございます。大学としても美し国おこしには期待しておりますし、ぜひ協力させていただきたいと思えます。地域に根ざす三重大学と、持続する地域づくりを目指す三重県が、地域とともに生きるという意志のもと、これからもいろんな連携をしていけば、必ずや大きな成果が生まれるでしょう。また、三重大学は国立大学を取り巻く厳しい状況の中でも、果敢に挑戦を続けてきました。まさにWinWinの関係を構築しようと懸命に努力し、今、その成果が形になりつつあります。これをさらに三重県と一緒に追求めてまいりたいと思えます。

司会 本日はありがとうございました。



(※1) 都市エリア産学官連携促進事業(発展型) 文部科学省の施策。2008年度、三重県・三重大学・三重県企業による提案「新世代全固体ポリマーリチウム二次電池の開発と高度部材イノベーションへの展開」が採択された。四日市に開設された県の「高度部材イノベーションセンター」はその中核拠点。

(※2) PBL 学生が少人数で自主的に取り組む問題発見解決型教育・学習。

(※3) ダブルディグリープログラム 2006年、三重大学は、天津師範大学と大学間協定を締結し、日本語教育コースを開設。両大学の同コースの学生が相互に2年留学し所定の単位を取得すれば、両大学の併せて2つの学位(学士)が授与されるプログラムを開始。

(※4) みえメディカルバレー(構想) 三重県の3つのバレー構想の一つ。県内の大学や研究機関、企業、サービス事業者などが連携し、競争力のある医療・健康・福祉産業の創出と集積を図ることを目的とする。

(※5) 四日市フロント 企業や自治体などへの技術支援やセミナーの開催など、北勢地域における三重大学の地域連携の拠点として活動。三重北勢地域地場産業振興センター(じばさん三重)内にオフィスを構える。

(※6) 美し国おこし・三重 2009年から2014年にかけて地域の多様な主体が特色ある地域資源を生かして取り組む地域づくりを基本に、多様な催しを展開することによって、地域の魅力や価値を向上させ、発信するとともに、集客交流の拡大を図り、自立・持続可能な地域づくりにつなげていく取り組み。三重大学長もこの取り組みを推進する実行委員会の委員。



人文学部准教授
森 正人

もりまさと
博士(地理学)
専門分野は文化地理学、民俗学

この記事に関連した情報は以下のアドレスでもご覧いただけます。

<http://www.human.mie-u.ac.jp/~mori/index.html>

右図／複雑な力のせめぎ合いと交渉への視点は、フランスの思想家のミシェル・フーコー、ジャック・デリダ、ジル・ドゥルーズからヒントを得ている。



物事の複雑な関係性を探り、 自明視された文化を追究する。

普段、何も考えることなく受け止めているさまざまな文化現象。しかし、そこに目を凝らすと、固定観念の曖昧さや事象の複雑な関係性が浮かび上がってきます。人文学部では、文化地理学の観点から文化を追究し、物事を疑い、思考し続けることの重要性を発信しています。

思考停止の前に

日常生活で何かを深く疑うことがあるでしょうか。私は文化地理学を通して、自明視された空間、場所、文化を考える研究をしています。とはいえ、何か統一的なトピックがあるわけではなく、四国遍路、日本人論、衛生観念と環境観念における人間の感覚、おしゃれな都市空間と社会的排除の問題、ポップ音楽などを通してそれを考えてきました。ここでは、普段何気なく耳に入っている音楽を考えてみたいと思います。ポップスの各音楽ジャンルは、あるパイオニアが特定の目的で作ったもので、今や本来の目的から外れて大衆化していると説明されることがあります。しかし、音楽はある場所に留まるので



イギリスで産業革命や都市化が進展すると、民謡歌手はストリートミュージシャンへと転業した。彼らは人々の関心を引くためにしばしばサルを連れていた。



ストリートミュージシャンたちの定期的な演奏の場として、19世紀のイギリスにはミュージックホールが誕生した。写真はシャンペン会社と契約し商品を広告した売れっ子芸人のジョージ・レイボーン。



アメリカでの蓄音機の発明やラジオの普及により、音楽は一定の時間内に終わる必要がでてきた。事前に演奏の打ち合わせをし、大人数でそれをバンドとして演奏する「スウィング・ジャズ」が登場した。



1950年代のイギリスでは、カントリーミュージックはスキップフルというジャンルに吸収された。ジョン・レノンなどのロックミュージシャンは、このスキップフルから音楽生活をスタートしたと言われる。



しばしばジャズの起源地と言われるアメリカ、ニューオーリンズの「悪所」のストーリービル。しかし、すでにラグタイムなどさまざまな音楽ジャンルが周辺地域には存在していた。

はなく、さまざまな場所を移動しながら受容されたり拒絶されたり、別の音楽との衝突の中で改変されたりと、常に変化し続けています。また、「あの音楽は、昔は社会的不満の表明だったけど、今は音楽産業によって商品化されてしまった」というものの言いは、商品化か抵抗かの二分法でしか音楽を捉えていません。しかし、音楽はその両方でもあり複雑です。

複雑なものに目を向ける

現在の英語圏人文学では、人間存在の複雑さが議論されています。それは複雑論的転回、とくに「存在」を沈思する態度は存在論的転回と呼ばれます。音楽は空気のある法則に従って振動させた非物質です。しかし、空気を振動させるには物質が必要です。また、音楽の産業化には、コンサートホールやレコードやラジオ、最近ではiPodや携帯電話などの物質が必要です。そうして物質化された音楽が、人間の意志という非物質を作ったり刺激したりして、新しい社会制度やネットワークなどの物質的生産を要求します。従来、人間と非人間(動物、自然、物質など)は二項対立で捉えられてきました。そこには、対立する二項はいずれ予想される結果に向かう予定調和があります。しかし音楽は、物質と非物質が何度も折り重なりながら形成されているのです。それでも、一つの音楽ジャンルが結果的に形成されたと言っても、それも予定調和だと言われてしまいます。どうすればこの袋小路を抜けられるのでしょうか。

述語としての世界

あらゆる音楽ジャンルは一つの「歴史」を持っているかのように語られます。しかし、その周辺に目を配ると、今では一つの音楽ジャンルやその歴史に含まれていない、いくつもの「そうにもなりえた歴史」があります。例えば、同じ音楽でも白人向けのカントリーと黒人向けのブルースと呼ばれていたように、音楽ジャンルごとの差異も実は明確ではありません。時間のあらゆる断面では、いくつもの可能性があります。それらのうち、行われたと語られたものが、本当に起こったこととして記録されるのです。ここでは、主語が述語を決定するのではなく、述語が主語を決定します。何かが先に実在するのではなく、何かは事後的に実在するのです。アメリカ南部がジャズやブルースの発祥地として紹介されますが、その場所や空間がその音楽を作り出したのではなく、語られる中で、ブルース発祥地としてのある場所が立ち上がるのです。しかも私たちがジャズの歴史を語り得るのは、ジャズとして既に誰か(他者)によって語られているからです。私たちは、自分で何かを考えているわけではありません。他者の言葉を語るという身振りの中で、「自分」という主語が生起するのです。自分と他者、あるいは人間と非人間は常に襲いのように折り畳まれています。だから、両者を分ける切断線の上に身を置いて見つめることで、なぜそうした切断線ができたのかを問うことができます。

立ち止まらずに考え続けること

最近の私の一連の研究は、単純な二項対立の決定不可能性を何かの契機を手がかりにして探し出す点で共通しています。これらを考える身振りを繰り返す中でのみ、かろうじて私らしきものが生成されています。ただし、述語が主語を決定するなら、一秒前と現在の私たちは別人のはずです。だから、立ち止まって思考しているように見えても、立ち止まってはいないのです。そうすると、私たちは時間と空間に対する新たなイメージが求められるのではないのでしょうか。世界はその度ごとに全面的に始まり、終焉しているのでしょうか。



教育学部准教授
滝口 圭子

たきぐちけいこ
博士(心理学)
専門分野は、発達心理学、認知心理学

この記事に関連した情報は以下のアドレスでもご覧いただけます。
<http://www.mie-u.ac.jp/links/research/>

右図／園児を対象としたフィールドワークの様子。
 ※本文の内容と、掲載写真の園児とは関係性はありません。



ワーキングメモリとの関連を解明し、 テキスト理解のモデル化を目指す。

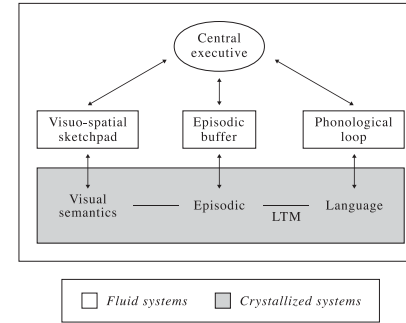
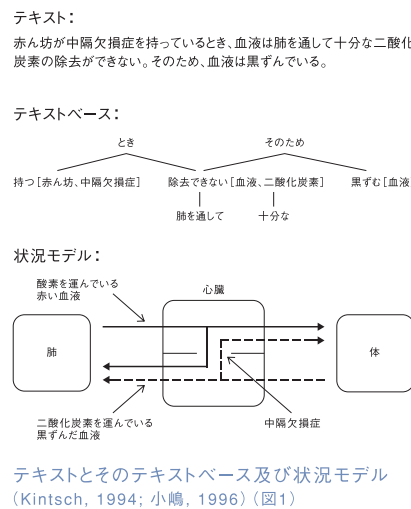
文章や会話などのテキストを、人はどのように理解するのか。その過程には、情報の種類やワーキングメモリが関係しています。教育学部では、こうしたテキスト理解の研究を進める一方で、発達障害のある子どもたちのための教材を開発し、小学校就学や中学校進学への支援を行っています。

得難い体験が研究の礎となって

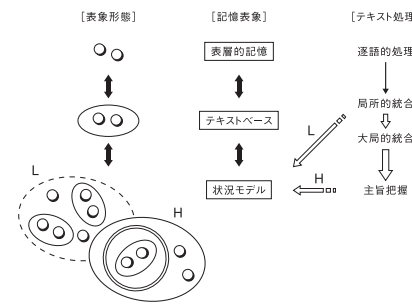
就学前の幼い頃、毎晩、眠る前に祖母に絵本を読み聞かせてもらっていました。穏やかな湿り気のある少し高い声、今このときが永遠に続くのではないかと思わせるような鷹揚とした語り口、深く刻まれた皺に隠れて見えなくなりそうな目、寂しげに笑っている口元。そこには言葉では表現し得ない確かな安らぎがありました。自分のかけがえのなさを、言葉ではなく惜しみなく伝えてくれる人と、毎夜、時間と空間を共有できたことは、文字通り、現在の私をつくる得難い体験となりました。おそらくはこの体験が礎となり、子どものテキスト理解や情報処理に関する研究を続けて10年余りになります。

さまざまな情報がテキスト理解を支える

テキストとは、単一の文を超えた言語表現のことで、本や新聞などに書かれた言語のみならず、会話などの話された言語も含まれます。今では、テキスト理解は一種の問題



ワーキングメモリのマルチコンポーネントモデル (Baddeley, 2006) (図2)



テキスト処理、記憶表象及び表象形態 (小坂・山崎, 2000)
 テキスト処理における矢印の太さはワーキングメモリ容量の影響力の大きさを、Hはワーキングメモリ-大群、Lはワーキングメモリ-小群に想定される差を表し、○は逐語的処理後の所産を、◎は主旨形態を表す。(図3)



発達障害の理解のために (厚生労働省, 2007) (図4)



LD, ADHD, 高機能自閉症等の子どものための指導教材集 第1集 (図5)

解決であると考えられ、読み進めているテキスト情報を、先行情報や長期記憶からの情報と関連づけ、最終的に一貫した表象を形成する活動であると捉えられています。テキストの理解には3レベル(表層レベル・命題レベル・状況レベル)が想定され、最も深い状況理解レベルは、テキストから得られる情報と読み手の既存知識のようなテキストには明示されていない情報とを統合して形成されます(図1)。そして、より深いテキスト理解を可能にする要因として私が着目しているのが、ワーキングメモリです。

ワーキングメモリ容量との関連性を追究

日常生活においては、情報を処理しつつ、処理した内容を一時的に覚えておくという作業が、意外に多く求められます。買い物先での練り上がりのある計算もそうですし、友だちとの会話もそうです。会話では、目の前の相手の話している内容を理解し、その内容を記憶しながら、次に続く話の内容を理解していく必要があります。このように、目標に向かって情報を処理しつつ一時的に必要な情報を保持する働きを担うのがワーキングメモリです(図2)。私はこれまで、年長児(5-6歳児)のテキスト理解を言語ワーキングメモリとの関連性から追究してきました。言語ワーキングメモリ容量の大きい幼児は、例えば「雲と降雨」のような馴染みのないテキストの読み聞かせにおいても、テキスト理解は比較的良好です。一方、言語ワーキングメモリ容量の小さい幼児も、能動的に推論を行いながらテキストを理解していますが、時に不必要な情報を抑制できないまま最終的な理解に至ることがあるようです(図3)。現在は、言語ワーキングメモリのみならず視空間ワーキングメモリをも配置したテキスト理解のモデル化を目指しており、将来的には年少児(3-4歳児)から成人にいたるテキスト理解の発達を描くことを構想しています。その過程で、テレビやゲームなどのメディアとの接触とテキスト理解との関連性に言及する必要も生じるであろうと考えています。

発達障害のある子を支援する教材開発

広島大学で日本学術振興会特別研究員をしていた際、発達障害の子どもたちを対象とする教育相談のメンバーに加わりました。2005年施行の発達障害者支援法では、発達障害を自閉症、アスペルガー症候群、その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害、その他これに類する脳機能の障害と定義しています(図4)。教育相談は、教職志望の大学院生がプログラムの作成と実施を担当し、私を含めた認知心理学研究者がプログラムの効果を検討するという分担で進めました。この活動を通して得た貴重な知識や経験を胸に、三重大学赴任後は巡回相談員として三重県内の保育園、幼稚園、小学校に赴き、発達障害の子どもたちや、発達障害の子どもたちとともに生活している多くの子どもたちへの支援の在り方を先生方とともに模索しています。さて、当時の教育相談メンバーと開発したのが「小学校移行支援ワークブック」と「中学校移行支援ワークブック」です。この教材は、日本LD学会が2005年度に実施した第1回指導教材公募において会長賞を受賞し、他の入賞教材とともに2007年に明治図書より出版されました(図5)。発達障害のある子どもは、小学校就学時や中学校進学時に、新しい環境への適応のしにくさから失敗の経験を重ね、学習意欲を失ったり、情緒が不安定になったりすることがあると言われています。そこで、事前にこれらの教材を通して、小学校や中学校での生活の流れや学習、対人関係に関する知識を得ることで新しい環境への不安が軽減され、前向きな気持ちを養うことができると考えました。教材開発メンバー一同、一人でも多くの方に実際にご使用いただき、忌憚ないご意見をいただければと思っています。

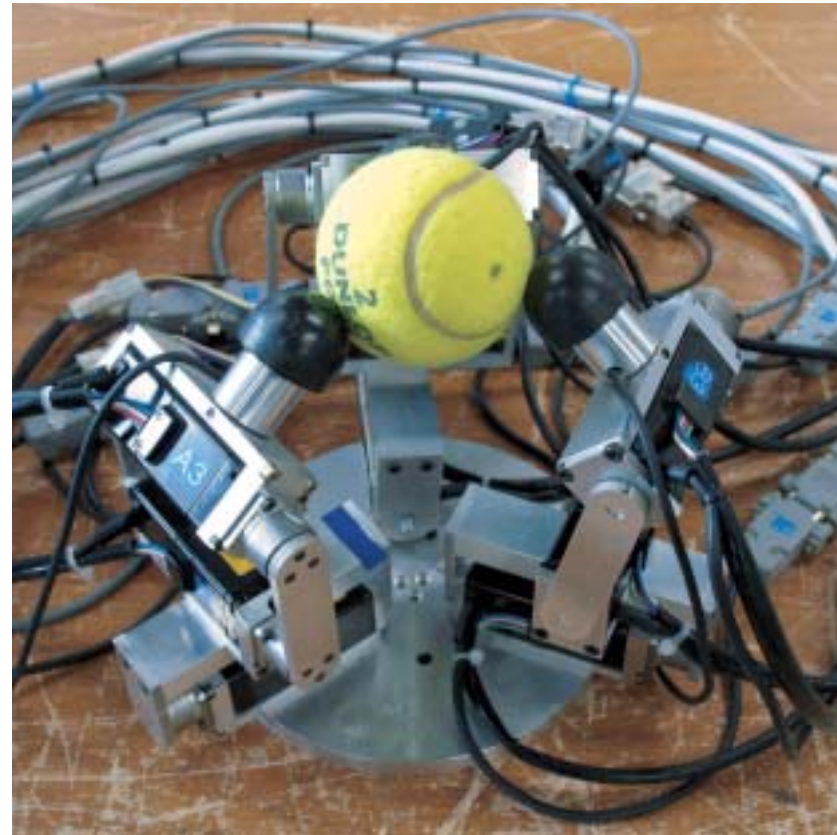


大学院工学研究科教授
平井 淳之

ひらいじゅんじ
博士(工学)
専門分野は、電気電子工学のうち制御、メカトロニクス、
パワーエレクトロニクス、ロボティクスなど

この記事に関連した情報は以下のアドレスでもご覧になれます。
▶ <http://www.mie-u.ac.jp/links/research/>

右図／ロボット多指による物体の把持と操り制御



世界を視野に、人間と共生する 次世代メカトロ研究を推進。

社会構造が変化中、メカトロ・ロボット産業の拡大化が予想されています。工学研究科では、持続可能な人間・機械共生社会の実現を目指しロボティクスを含むメカトロニクス分野の基礎・応用研究を展開しています。新しい付加価値の創出、世界レベルの独自技術開発に挑むとともに、地域活性化と産官学のグローバル対応への貢献活動も行っています。

人間に学び、人間と機械の共生を目指す制御を研究

社会構造の変化とITを中心とする技術革新が、将来に向けてメカトロニクス、とりわけロボット産業の新規需要を創出していくのは確かです。これを受けて大学をはじめとする高等研究機関では、同分野研究のベクトルを「人間に学び、人間と機械の共生を目指す研究」に向けつつあります。我々もこのような状況を意識し、介護用ロボットやサービス用ロボットなど人間社会空間において、より人に近くかつ多様な作業を行うことのできるメカトロ・ロボット技術の実現を目指し、以下に代表される長期テーマの研究を行っています。



下肢リハビリ支援マニプレータ制御



腱駆動機構における位置および剛性制御

その一つが、「リハビリ支援ロボットマニプレータと下肢筋張力の最適推定」。後継者不足の理学療法分野で、いかに患者(特に脳卒中などの後遺症で下肢機能麻痺)の運動機能回復をロボット支援型の自動運動によって図るか、またその改善効果(筋張力回復)をいかにして患者に可視情報でフィードバックし、自律回復へのモチベーションを高めるかという基礎および実践研究です。

もう一つが、「腱駆動機構における位置および剛性制御の研究」。人間空間において共生するロボット上肢の①安全性という観点からの柔らかさ確保と②作業の多様性を可能にするための剛性調整機能の実現に関するものです。これらの要求を満たす柔軟な関節機構として非線形バネ要素を用いた腱駆動機構が提案されていますが、我々は同機構を用いた場合の関節剛性指令の生成戦略及び位置と剛性制御間の非干渉化実現のための研究に取り組んでいます。

世界レベルの独自技術実現に向けて

政治あるいは経済の世界でもそうですが、特に全体として複雑・巨大化した組織で、地方が十分な自己判断管理機能を保有するに至った状況においては、旧来型中央集権(中央が詳細情報を受け判断し地方に指示発信する)形態では、迅速処理や部分最適化への対応がうまくできない場合があります。これは機械システム(含むロボティクス)の分野でも同じで、知的判断指令ユニット(CPU)と運動実現機能(電動アクチュエータ)が機械の隅々まで入りこめるようになってきた現在、価値多様化に伴う多品種変量生産あるいは作業多様化の要求に柔軟かつ迅速に対応するためには、分散型情報・制御駆動系の実現が不可欠です。しかし、現実問題として、これを困難にしているのがエネルギー伝達系および情報伝達系に使われる煩雑な電気配線(経済でいえば硬直化したロジスティクス及び伝達ルート)の問題です。従って当研究室では「無接触モーション伝送方式」という配線を用いない独自の的方法論をもって機械的再構成(すなわちリストラクチャリング)に容易に対応できるメカトロシステムの実現を、ハードウェア、ソフトウェアそして制御理論の三つの面から最適構築しようとしています。同研究は、我々が目指す世界レベルの独自技術実現への挑戦の一つです。

ロボティクス技術による地域活性化と産官学連携

経済産業省が描く科学技術政策・産業化ビジョンによれば、2025年時点までに高齢少子化等の社会構造変化がロボット産業の新規巨大な需要を創出するとあります。しかしながら、そこに至る以前に地域とともに生きる大学として、今日的な地域経済の活性化にどう貢献、寄与するのかという課題および使命があります。三重県の第二次産業(特に高付加価値的産業)の現状を見るに、半導体／液晶の基幹製造事業所を県内に内包するもののBRICs台頭によるコスト競争に対応できず、その下請的企業を中心に産業の空洞化現象が起き、経営の行き詰まりが多発しているという状態です。このような状況で地域行政トップが打ち出した施策が「知的集約型産業への構造転換」であり、その一環として短中期的なメカトロ・ロボット技術産業の拠点形成と集積構想が掲げられました。一昨年これを受け「三重県メカトロ・ロボット研究会」が産官学の連携により立ち上げられ、その活動が進められつつあります。また、その中では隣接する愛知県の経済的活力に依存するだけでなく、独自ルートを切り拓き、世界的見地で同分野の技術・産業を生み育てていこうとする動きも始まっています。活動はまだ緒についたばかりですが、同研究会に参加する者として、皆様のご理解ご支援をいただき、これを実利のあるものとしていきたいと考えています。



三重県メカトロ・ロボット研究会

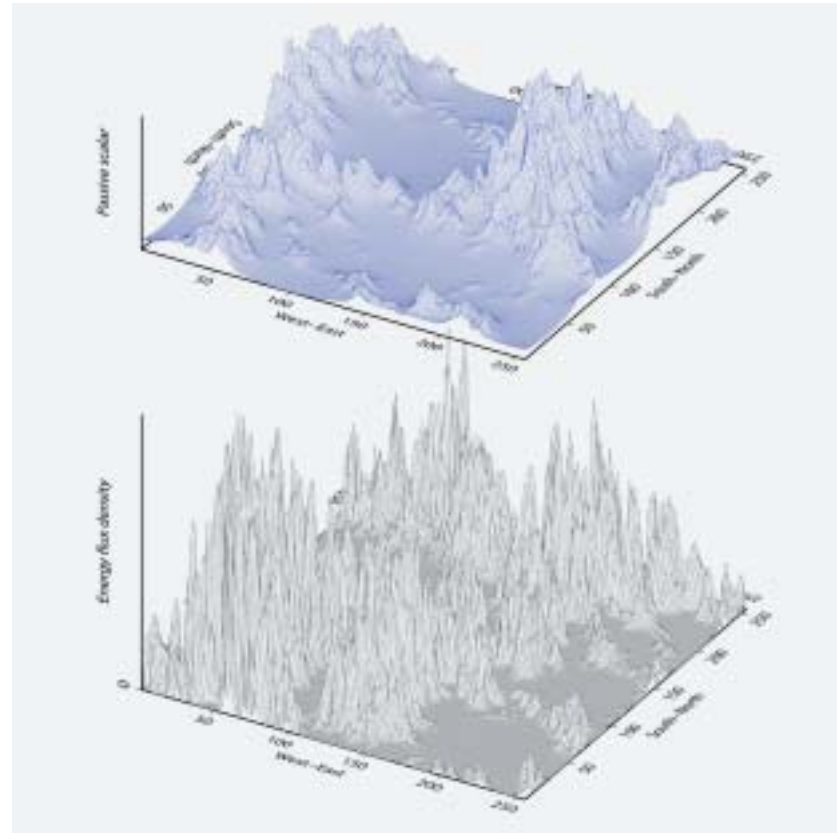


大学院生物資源学専攻教授
葛葉 泰久

くずはやすひさ
博士(工学)
専門分野は、水環境学、河川工学、水文・水資源工学、気象学

この記事に関連した情報は以下のアドレスでもご覧いただけます。
▶ <http://www.mie-u.ac.jp/links/research/>

右図／マルチフラクタルモデルで生成させた降水量の空間分布の例。
下の図に示したような「場」から上の図に示すような「降水量の場」を生成させる。(図4)



治水や災害予測に貢献する、降水量の算定に挑み続けて。

ときに人間の生命や財産を奪う、豪雨・洪水などの自然災害(図1・図2・図3)。被害を防ぐためには、100年に1度の大災害への備えも必要です。生物資源学専攻では、こうした治水対策の根幹となる確率降水量算定法の開発などの自然災害予測研究を推進。水災害と関連のある気候変動の原因解明にも取り組んでいます。

人間の生命保護を第一に、環境に配慮

私は工学部土木系学科を卒業し、自然災害科学、水文・水資源学、水環境学、気象学等を専門としています。本稿では、気象・水災害を防ぐための研究について書きたいと思います。我が国では、人口の多くが河川によってできた臨海部の低地に集中しています。それらの河川は、(何もしなければ)いつも暴れ、平地の形状を変えるはず。それが「自然」です。我がままな人類が「水害が多くても平地に住みたい。でも財産を水害から守りたい」などと無理を言うので、河川を一定の河道に押し込めているのです。この時点で、「自然環境」と「人間の生命・財産保護」のコンフリクト(対立)がすでに起こっています。今の姿勢の考え方は、「人間の生命・財産保護」を「環境保護」の上に置いた、「できるだけ環境に配慮する」というもの(人間中心主義)だと思っています。「人間の生命・財産の保護、特に生命」が第一優先であることは、押さえておくべきです。つまり、私は、衣食住において「生きている動植物」を資源として利用し、また抗生物質等を利用する人によって語られる「極端な」「人間非中心主義 ≈ 生命中心主義思想」



上:2004年台風21号による三重大学周辺(R23)の内水氾濫(撮影:小林康之氏)
下:同じ場所の普段の様子(図1)

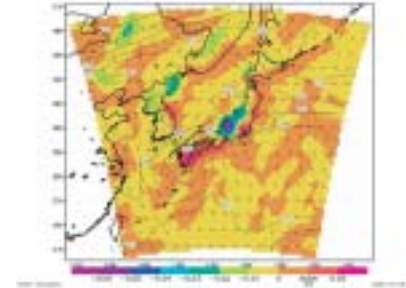
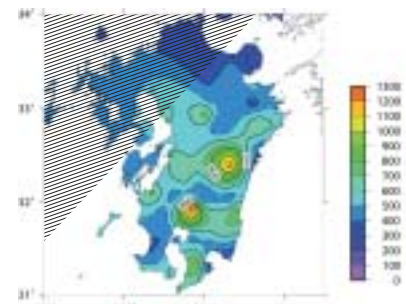
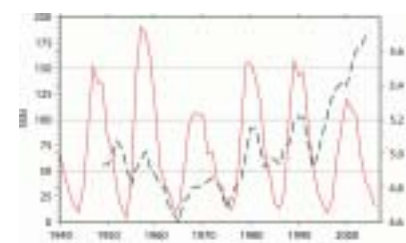


図1の台風時(2004年9月29日6時頃)の地上付近の風向風速、上空(850hPa面)の温度、地表付近の鉛直方向の風速を表した図。
ただし、著者らによる再現計算結果である。(図2)



120年に1度の大雨の48時間降水量(九州地方)確率統計モデルによる計算値で、左上のシェードがかかった部分は解析範囲外。(図3)



最近の太陽活動(黒点数:赤線)と地球の表面温度の移動平均(破線)太陽活動と温度に関連がありそうにも見えるが、1995年以降は傾向が変わっている。二酸化炭素による人為的暖化に懐疑的な研究者は、こういう傾向にも注目している例が多い。(図5)

に極めて懐疑的だということです。

治水対策の柱となる降水量の算定法を研究

気象・水・土砂災害を防ぐためには、長期と短期、双方の対策が必要です。前者には、堤防・ダム建設などのハード的なものと避難計画立案などのソフト的なものがあります。後者には、例えば豪雨時の短期予報などがあります。私が所属する生物資源学専攻COEグループでは、土砂災害を含め、これらの災害対策に資するための研究を行っています。ここでは超長期対策に関わる部分について述べます。行政は、管轄する河川の流域について「何年に1回程度起こる大きな(深刻な)豪雨・洪水に耐えられるように守る」という目標を設定しています。財産価値の高い場所では200年に1回の大きな災害を防ぎ、低いところでは20年、というような考え方は極めて妥当なものです。そこで、「この流域で〇年に1回現れる河川流量・水位は?それを生み出す降水量は?」ということ算定する理論と技術が重要になってきます。もちろん物理的な知見も必要ですが、主に確率・統計論を用いた解析を行います。用いるデータは、多くて100年強、少ないところでは、20~30年程度です。30年のデータから、例えば「100年に1度の降水量」を算定するわけですから、算定法(使用する確率モデル)によって、異なる値が出るのが自然ですが、治水政策の根幹部分ですから、客観的で正確な算定法を開発する必要があります。このあたりが我々のグループの研究テーマの一つです。

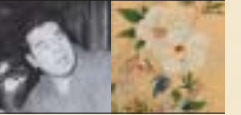
数学理論により生成した降水量から災害予測に挑む

長期予測では、上記のようにあらかじめ算定した「100年に1度の降水量」を計画策定に用いることとなります。ですが、雨量観測点は非常に疎に分布していますので、観測点のない点での予測は非常に困難です(1km離れれば、様子が全然違うこともしばしばです)。多くの点からなる面的な降水量が河川に集まって、洪水流を作るわけですから、各地点でピークの降水量が異なり、それが現れる時間に差があれば、河川流も複雑な挙動を示します。結論として、面的な降水量としての「〇年降水」は、簡単に決められないということです。そこで、現在では、どの点でも同じように雨が降ると考えるなど、簡単な扱いがされています。図4は、マルチフラクタルを使って生成した仮想的な空間的降水量分布の例ですが、こういう理論を用いて現実的な降水量(時・空間)分布を想定し、それにより災害の予測をしようという試みを続けています。

気候変動の真の原因究明もテーマに

最後に気候変動と災害についてですが、今の段階では、現在の気候変動・温暖化の本当の原因が何であるかは、よくわからないと私は考えています(図5)。「IPCCが言ったから人為的二酸化炭素排出が主因である」というなら、今でも太陽は地球を中心に回っているはず。ただし、「石油依存の社会システムからの脱却」という目的は、我が国将来に資するものであり、たとえ「人為的二酸化炭素排出主因論」が大間違いであったとしても、エネルギーを無限に使い続けるのを改めるのは非常に良いことでしょう。温暖化に対する効果はともあれ、森林を守ることも悪いはずがありません。ただ、二酸化炭素は温暖化の十分条件であっても、(私には)必要条件には見えませんので、サイエンティストとして、「本当の原因の究明」に興味があるわけです。気候・気象は、エネルギーと水によって動いていますので、水災害と気候変動は大きな関連があります。将来的な災害の状況を予測するため、気候変動の原因究明も自分のテーマの中心に置き続けるつもりです。

知られざる
三重にまつわる
文学・美術を
紹介します。



三重県立図書館蔵
終戦直後、「肉体派作家」として田村泰次郎の名前を一躍有名にした『肉體の悪魔』と『肉體の門』

CHRONICLE OF MIE vol.2
【文学編】

尾西 康充 おにし やすみつ
人文学部・文化学科教授
専門は日本近代文学

戦争を描いた
小説家、
田村泰次郎。

『肉體の門』で有名な田村泰次郎は第二次大戦中、中国に出征。捕虜による劇団運営を任せられ、その経験は後の小説の素材となった。また、故郷・四日市を舞台として、戦友をモデルに名作を残している。

田村泰次郎と言えば、戦後焼け野原となった東京の街で強かに生きる私娼を描いた小説『肉體の門』（昭和22年／1947）が有名である。戦時統制の下で心身ともに飢えを余儀なくされていた大衆の欲望を満たす泰次郎の風俗小説は、戦後の混迷する世相を映した鏡であった。どの作品も発表されるごとに話題作となって、雑誌や出版社からの原稿の依頼が殺到し、昭和21年（1946）3月から8月までの半年間で400字詰原稿用紙455枚を書き上げ、13,150円の印税を得た。月平均にすれば66枚と2,191円になる。国家公務員1種行政職（大卒）の月額基本給が540円の時代であるから、いかに多額の収入を得ていたかがわかる。印税を利用して、まだ焼失したままであった新宿の土地を買い、画廊の経営にも乗り出した。だがその一方で、風俗小説の濫作は作家としての声望を落としてしまう結果をもたらした。

泰次郎は明治44年（1911）に四日市市東富田宮町に左衛士・明世夫婦の二男として生まれた。左衛士は県内屈指の名門校・旧制富田中学校（現四日市高等学校）の初代校長で、高知県士族の生まれにふさわしい豪放で厳しい性格は、同校で長く語り継がれることになった。泰次郎は富田中学を卒業後、第二早稲田高等学院、早稲田大学文学部仏文科に進学する。大学を終えた後は、当時流行していた新心理主義の手法を使う新進作家として注目される存在になる。だが昭和

15年（1940）に応召、中国山西省左権県に出征する。標高3,000メートルを超える太行山脈の峰に設けられた分哨陣地のトーチカに配備された。冬は気温が零下40℃まで下がり、地表下1メートルが凍りつくという酷寒の土地で、中国共産党軍の総司令部が目と鼻の先にある最前線のトーチカに立てこもって、敵の来襲におびえながら生活した。

まもなく泰次郎は旅団司令部直属の



田村 泰次郎 たむら たいじろう

小説家
1911年～1983年

明治44年（1911）に三重県四日市市に生まれる。第二早稲田高等学院を経て早稲田大学文学部仏文科卒業。在学中に井上友一郎・坂口安吾・河田誠一らと同人誌「桜」を創刊し、新進気鋭の新人作家として早くから注目されていた。昭和15年（1940）に応召、中国大陸の各地を転戦する。復員後すぐに『肉體の悪魔』、『肉體の門』、『春婦伝』などの作品を発表すると、それらはたちまち大ヒット作となり、荒廃した戦後社会の読者から「肉体派作家」として熱狂的に支持された。昭和58年（1983）死去、享年72。

宣撫班に転属され、日本軍への協力を呼び掛ける劇団の運営を任せられる。捕虜を団員として利用した劇団は「和平劇団」と名づけられ、山西省内の各地で巡回講演をおこなった。当時のいきさつを作品の素材に使用したのが小説『肉體の悪魔』（昭和22年／1947）であった。

泰次郎が5年3ヵ月におよぶ従軍生活を終えて復員したのは昭和21年（1946）2月、すでに35歳に達していた。長く続いた戦争のために多くの犠牲を払われた彼の世代は、アーネスト・ヘミングウェイにならって「失われた世代」と呼ばれた。評論家の荒正人は、失われた時間を今こそ取り戻そうと「第2の青春」の謳歌を主張した。

だが凄惨な戦場を体験してきた復員兵にとって、精神的な傷は決して癒えるものではなく、平常の生活に戻ってもつねに狂気の淵をさまよわなければならなかった。泰次郎は彼らの心の闇を描こうと試み、実際に精神を病んでいた戦友をモデルにして小説『失われた男』（昭和41年／1966）を完成させた。小説の舞台は故郷の四日市、戦後復興をいち早く成功させた裏側で、公害の危険が広がりはじめた時代に、復員兵の一人は、いまだに戦場の感覚が忘れられない。近隣の住民に暴力をふるい続け、結局、狂気の中で身を滅ぼしてしまう。

泰次郎の『失われた男』は「戦争とは何か」、「戦後社会とは何であったのか」という大切な問題を考える手がかりを与えてくれる名作である。



山西省左権県、出征した泰次郎が配置された町。



泰次郎の『和平劇団日記』。
（三重県立図書館蔵）



『肉體の悪魔』のモデルとなった捕虜の中国人女性。（三重県立図書館蔵）



『田村泰次郎選集』（全5巻）表紙写真。
（三重大学附属図書館蔵）



伊勢長島藩五代藩主・増山正賢は、雪斎の号で知られる文人だった。当時は「風流自在」と尊敬を集め、今日では、花鳥画の画人として洗練された感性の息づく作品が高く評価されている。

「とろろあおい 黄蜀葵に かわせみ 翡翠図」

CHRONICLE
OF MIE
VOL. 2
【美術編】

山口 泰弘 やまぐち やすひろ
教育学部・美術教育講座教授
専門は江戸時代絵画史

江戸時代・19世紀前期 絹本着色
94.6×31.1cm 個人蔵

寛政6年(1794)初めて江戸に出た出羽松山藩士相良助右衛門は、ある日、とある大名屋敷を訪れた。通された座敷に、助右衛門は目を見張る。

座敷は、残らず中国風で、亀甲石を敷き、壁は漆喰で塗られてことのほか美しい。長押しには中国製(あるいは中国風)の山水画花鳥画の額や硝子絵など珍しい画が掛けてあった(※1)。

硝子絵は、透明なガラスに裏側から主に油彩で風景や花鳥・人物を描き、表から透明感を楽しむ。中国の広州で作られ、主に西欧に輸出され、日本にももたらされた。ともあれ、助右衛門はいきなり中華空間に投げ込まれたのである。おまけにこの家の主は、曲祿(※2)に腰掛けて彼を迎えた。主の名は増山正賢(※3)、三重県桑名市にあった伊勢長島藩第5代藩主で、雪斎の号で知られる。初対面にもかかわらず、主は馳走で助右衛門をもてなしたが、器から箸に至るまで中国からの輸入物で取り揃えるという徹底ぶりに、助右衛門は舌を巻いている。残念なことに彼自身このときは体験できなかったが、懇意になると中国風のコスチュームに身を包んだ女中が給仕に当たることもあったという(※4)。

雪斎は、生前、高名な文人として尊敬を集めていた。相撲番付に見立てて当時出版された“文人番付”では、大関(当時は横綱ではなく大関が最高位)を超える

地位、行司に充てられたほどである。囲碁・書・煎茶に関する著作があり、中華文化に対する造詣の深さがわかる。また、儒学に関する著述もあり、儒教的教養人としての学識もうかがわせる。

西欧諸国をモデルとして近代化が進められるようになる明治より前には、中華文化は精神生活の理想と捉えられることが多かったが、それに飽きたらず日常生活に至るまで中華尽くしという人は多くない。経済的裏付けを必要としたことも一因である。もっとも2万石の小藩の台所は、ために火の車であつたらしい。

雪斎は多芸多才の文人であつたが、今日、最も評価されるのは画である。とりわけ



増山 雪斎 ましやま せつさい
1754年～1819年

増山雪斎は、宝暦4年(1754)伊勢国長島藩主の長子として江戸に生まれ、23歳で所領2万石を襲封した。名は正賢(まさかた)、雪斎はその号である。雪斎の芸域は、多方面におよんでおり、著作を取り上げると、囲碁、煎茶、儒学、博物学、書などに広がっている。雪斎は花鳥画を最も得意としたと言われるが、その花鳥画はいずれも華麗な色遣いと写実的な形態描写を特徴としている。

花鳥画の評価が高い。享保16年(1731)、中国浙江省から一人の画人が長崎を訪れた。名を沈南蘋(しんなんびん)という。南蘋の画は、鹿・猿・兎・鶴・鳳凰・孔雀などの走獣や鳥を花卉と取り合わせて濃厚華麗な色彩で描いた写実的な花鳥画が主で、その影響は、江戸時代後期、雪斎の時代になるとほぼ全国に拡がり、のちに南蘋派と称される一大画派を形成するようになった。雪斎は、今日、南蘋派を代表する画人の一人に数えられる。

今回紹介する雪斎の「黄蜀葵に翡翠図」は、紅色の小花を咲かせるサルズベリ、トロロアオイとカワセミという夏の景物が取り合わされた花鳥画で、南蘋派の作風をよく示している。その一方で、夏の強い日差しを白く透かすトロロアオイの軽やかな表現やカワセミの羽毛の繊細巧緻な描写には、雪斎固有の洗練された感性もうかがえる。流行の最先端を行く中華モダンのお洒落な画、同時代の眼にはそんなふう

に映ったはずである。深い教養と洗練された感性で中華文化に親しむ文人雪斎に、「風流抜群の人」(※5)、「風流自在」(※6)などと、当時の人は讃辞を贈っている。

(※1) 池田玄斎「弘采録」(文化11年(1814)序・酒田市立図書館蔵)所載の「増山雪斎侯の事」の一部を現代語に訳出。「増山雪斎侯の事」は、庄内藩士の著者が支藩松山藩士相良助右衛門からの聞き書きをまとめたもの。
(※2) 鎌倉時代に中国から渡来して主に禅宗で使われた椅子。
(※3) “増山”は、“まさやま”ではなく“ましやま”と読む。
(※4) ※1に同じ。
(※5) 雲室「雲室隨筆」文政10年(1827)
(※6) 金井烏州「無声詩話」嘉永6年(1853)



(左)雪斎は、博物図譜「虫多帖」の作者としても知られる。数ある虫のうち足のあるものを虫といい足のないものを蟻(あひ)と、『和漢三才図会』(正徳2年(1712)頃刊)は記す。蝶は、彩色に金銀泥を交えて写実的かつ美しく描かれる。(画像提供:東京国立博物館)

(右)雪斎「虫多帖」。カエル・カタツムリ・ナメクジが描かれる。中国の本草書「本草綱目」(1596年頃刊)は、いずれも「虫部湿生類」に分類する。また、漢字では蛙・蝸牛・蛞蝓と虫偏で表記される。江戸時代の通念では、これらや蛇も虫多に属した。(画像提供:東京国立博物館)

三重大学キャンパス・インキュベータ

三重大学発ベンチャーと 産学連携によるチャレンジを支援。

三重大学キャンパス・インキュベータは、大学発ベンチャーの立ち上げと自立、地域の企業と大学の連携による新たなビジネスへの挑戦を支援する施設です。紹介する2社をはじめ入居企業は大きく成長し、今後に期待が集まっています。

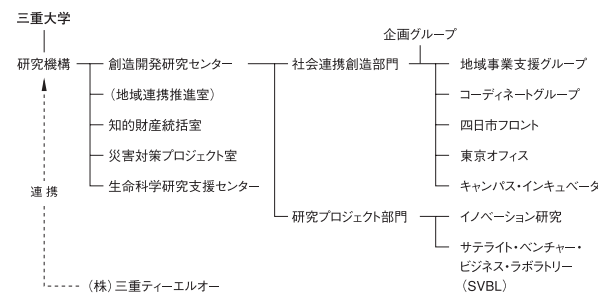
三重大学キャンパス・インキュベータ

最近の大学には教育、研究に加え、産学連携による社会への貢献が求められています。このような時代の流れに呼応して、三重大学が平成16年に設置した施設が「三重大学キャンパス・インキュベータ」です。大学の研究成果を基にした大学発ベンチャーの立ち上げを支援し、自立までを温かく見守る施設として、また、三重地域圏の企業が三重大学との連携によって新たなビジネスにチャレンジする「足場」となることを「三重大学キャンパス・インキュベータ」は目指しています。設立から4年が経過し、入居いただいている企業が順調に育ってきています。なかでも、三重大学在学中から学生ベンチャーとして立ち上げ、大きく躍進中の2社をご紹介します。5年目となる今年、これからが楽しみな企業が三重地域圏に数多くあることを実証していきたいと思えます。



前身は平成2年に発足した地域共同研究センター。平成16年、創造開発研究センターに改組され現在に至る。

◎三重大学の研究支援組織



◎平成20年度 三重大学キャンパス・インキュベータ入居者

- 株式会社イラボエクスベリエンス
- 株式会社医用工学研究所
- 株式会社HID
- 株式会社機能食品研究所
- 有限会社細胞外基質研究所
- 株式会社データスピリット
- 株式会社プリンシプル
- P&D/パートナーズ株式会社

三重大学キャンパス・インキュベータ

<http://www.crc.mie-u.ac.jp/incu/indexi.html>

お問い合わせ先
TEL:059-231-9006 / FAX:059-231-9047
ken-sinko@ab.mie-u.ac.jp

株式会社医用工学研究所

株式会社医用工学研究所では、電子カルテや医事会計システムをはじめとする病院情報システムのデータ統合と分析やデータ抽出を行うシステムを、三重大学医学部附属病院の協力の元、自社で開発し、ソリューションとして販売しています。

医療現場のニーズに対応することを目的とした、産学連携による製品開発は、医療に従事する皆さんの多くのご助言と、風通しの良いシームレスなコミュニケーションを実現できるキャンパスインキュベータの好立地が重要な役割を果たしてくれています。

株式会社機能食品研究所

株式会社機能食品研究所は、食品・原材料・化粧品の有効性・安全性といった機能性を証明するために必要なヒト試験（臨床試験）を提案・実施しています。

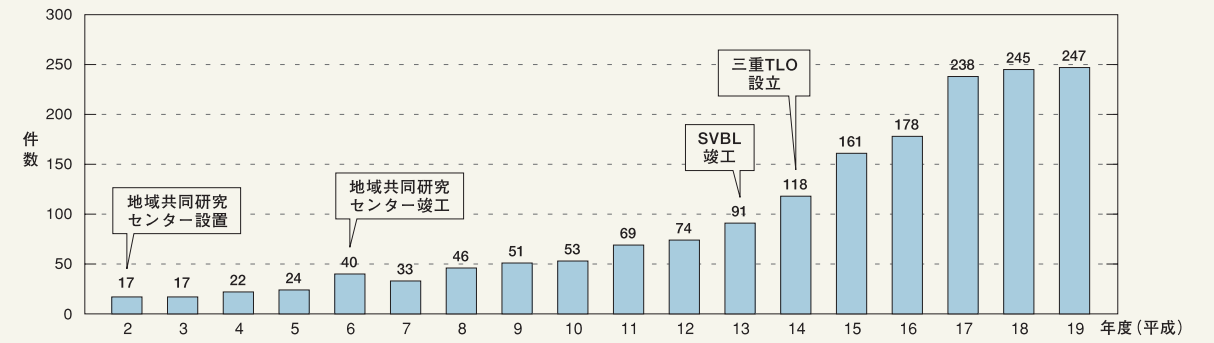
キャンパスインキュベータに入居していることで、お客様から厚い信用・信頼をいただいております。また、学内に本社があることで、NPO法人みえ治験医療ネットや、三重大学の先生方との密接な提携ができるため、精度の高いヒト試験を実施することができています。

T O P I C S

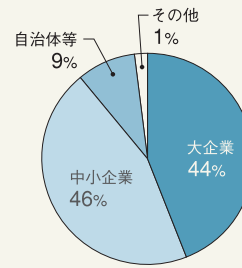
三重大学の研究と研究活動を通じた社会との連携

三重大学は教育と研究の成果を社会に還元するために、産業界や地域の公共団体との共同研究等の連携活動を推進しています。大学は、この連携によって、地域の文化の向上や活性化に貢献していきたいと考えています。

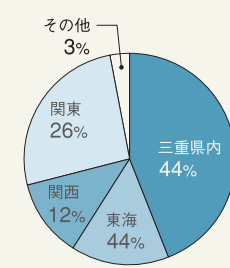
共同研究件数の推移



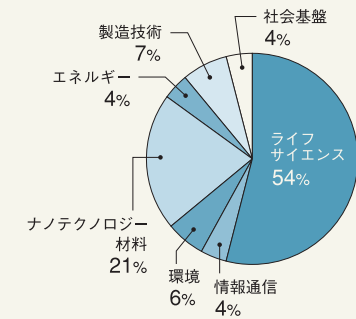
共同研究相手先の規模等



共同研究相手先所在地



共同研究の分野



平成18年度・全国大学別共同研究合計受入（件数順）

順位	機関名	件数	全体金額(A)	順位	機関名	件数	全体金額(A)
1	東京大学	906	4,532,046	11	静岡大学	259	399,695
2	京都大学	643	2,987,601	12	東京農工大学	254	649,221
3	大阪大学	643	2,352,261	13	三重大学	245	376,329
4	九州大学	567	1,605,014	14	千葉大学	244	469,254
5	東北大学	519	2,028,058	15	広島大学	232	509,611
6	東京工業大学	368	1,513,580	16	信州大学	231	280,031
7	北海道大学	362	869,960	17	岐阜大学	213	335,223
8	名古屋大学	337	949,841	18	名古屋工業大学	205	493,101
9	筑波大学	290	706,134	19	岩手大学	203	304,373
10	慶應義塾大学	279	18,822,184	20	山口大学	203	459,696

大型研究

※大型研究は、19年度～20年度（2008.06.30現在）

事業名	研究題目	学部等名	研究担当代表者
戦略的創造研究推進事業	マラリア原虫肝細胞感染機構の解析とワクチン開発	医学系研究科	鎮西康雄
がんトランスレーショナル・リサーチ事業	新規抗原蛋白デリバリーシステムによる多価性癌ワクチンの多施設共同臨床研究	医学系研究科	珠玖洋
「次世代の電子顕微鏡要素技術の開発」委託事業	自己整合型四極子収差補正光学システムの開発	工学研究科	畑浩一
次世代自動車用高性能蓄電システム技術開発／次世代技術開発	リチウム空気二次電池用リチウム-固体電解質複合負極の研究開発	工学研究科	今西誠之
戦略的創造研究推進事業	植物系分子素材の逐次精密機能制御システム	生物資源学研究所	船岡正光
生物系産業創出のための異分野融合研究支援事業	ヤマモリンの各種誘導体の分子設計と合成	生物資源学研究所	今井邦雄
重点地域研究開発推進プログラム 地域イノベーション創出総合支援事業	次世代真珠養殖技術とスーパーアコヤ貝の開発・実用化	生物資源学研究所	古丸明
都市エリア産学官連携促進事業（発展型）	新世代全固体ポリマーリチウム二次電池の開発	工学研究科	武田保雄
科学技術振興調整費女性研究者支援モデル育成	パールの輝きで、理系女性が三重を元気に	人文学部	小川眞里子
産学官連携戦略展開事業（戦略展開プログラム）	特色ある優れた産学官連携活動の推進	創造開発研究センター	奥村克純

T O P I C S

日本結晶成長学会第24回論文賞



大学院工学研究科教授
平松和政

窒化物半導体の選択成長技術に関する研究は、今日の発光ダイオードや半導体レーザー発展のきっかけとなった研究です。この研究が窒化物半導体結晶の低欠陥化技術に繋がり、さらには長寿命の青紫色レーザーダイオード実現に貢献するなど社会的なインパクトを与えてきました。このような功績が高く評価され、2007年11月6日に窒化物半導体の選択成長に関する一連の論文に対して、日本結晶成長学会第24回論文賞を受賞しました。

30周年記念風力エネルギー利用シンポジウム「論文ポスター賞」



大学院工学研究科教授
前田太佳夫 他4名

集合形風力発電所では風車風下に次の風車を配置すると下流側風車の発電量が著しく低下します。そこで大形風車の後流をドップラー式音波レーダによって測定して後流の影響範囲を調べました。この研究成果「ドップラー・ソーダによる風力タービン後流の測定」を2007年11月30周年記念風力エネルギー利用シンポジウムにおいて発表し論文ポスター賞を受賞しました。今後、風力発電事業の風車適正配置への応用が期待されます。

日本外科学会研究奨励賞



大学院医学系研究科教員
小林美奈子

第108回日本外科学会定期学術集会(2008年5月/長崎)において、「日本外科学会研究奨励賞」を受賞しました。本邦と欧米では周術期の予防的抗菌薬投与に関するガイドラインに相違があるため、どちらの方法が、より術後感染性合併症を減らすことができるのか、多施設共同RCTで検証しました。この報告が基となり、現在日本外科感染症学会では日本発のエビデンスを作成するため、全国参加型の予防的抗菌薬投与のRCTを開始しています。

30周年記念風力エネルギー利用シンポジウム「論文ポスター賞」



大学院工学研究科准教授
鎌田泰成 他4名

翼は航空機など広く利用されています。風力タービンも翼により風からエネルギーを取り出しますが、風の変動により翼に対する流れの方向が大きく変わります。このような流れを風洞装置で再現し翼の評価を行いました。この研究成果「動的流入条件における翼型性能」は、2007年11月30周年記念風力エネルギー利用シンポジウムにおいて発表し論文ポスター賞を受賞しました。今後、本評価法による新翼型の開発が期待されています。

T O P I C S

「輝かしい今年の梨花人」賞



人文学部教授
朴 惠淑

2008年5月、女子大としては世界最大規模を誇る韓国梨花女子大学の「輝かしい今年の梨花人」の式典において「輝かしい今年の梨花人」賞を受賞しました。この賞は、今年、創立122周年、同窓会100周年をむかえた韓国梨花女子大学の全卒業生の中から世界で活躍する輝かしい人に贈られ、これまでに、韓国現代グループ会長の玄ジョンウンさんや金ユンオク大統領夫人などが選ばれています。

日本熱帯農業学会学術賞



大学院生物資源学研究科教授
江原 宏

2008年3月、日本熱帯農業学会第103回講演会において「サゴ属植物の系統分類と生理・生態学的特性に関する研究」により学術賞を受賞しました。新規デンプン資源の開発を目指し、東南アジア、メラネシア、ミクロネシア、ポリネシアにおけるサゴ属植物の遺伝的変異、種子発芽特性、塩ストレス抵抗性などについての解析を進めてきたことが、近年、生物エネルギー原料と食料供給の間で新たな競合が生じている中で、高く評価されました。

セメント協会論文賞



大学院工学研究科教授
畑中重光 他3名

環境対応型コンクリートとして期待されているポーラスコンクリートの研究の一環として行った「小粒径ポーラスコンクリートの揚水モデルの構築に関する研究」によって2008年5月、三島直生助教とともに2008年度セメント協会論文賞を受賞しました。ポーラスコンクリート舗道は、内部の連続空隙によって、大雨の時でも表面に水たまりができません。逆に、保水も可能です。護岸には植物や虫が、魚礁には魚たちが住むこともできるなど、今後も楽しみな研究分野です。

Alcon Japan Clinical Award



医学部附属病院眼科講師
杉本昌彦

アルコン社は「日本における眼科臨床の進歩に大きく貢献し、今後も期待される」眼科医2名に毎年Alcon Japan Clinical Awardを授与しています。受賞者は杏林大学医学部の樋田哲夫医師を委員長とするClinical Advisory Committeeの6名で構成される独立の審査委員会が選考しました。2008年10月に京都で開催された日本臨床眼科学会における授賞式で賞が授与され、米国の眼科フェロウシッププログラム参加助成金が授与されました。

新自由主義改革と日本経済



櫻谷勝美・野崎哲哉 編著

三重大学出版会 / 2007 208ページ 1,800円(税別)

年々仕事が忙しくなるのに収入は増えない、納める税金は増えているのに社会保障の給付は削られる、景気は良くなって国際優良企業とよばれる大手企業は史上空前の利益をあげているのに、労働者への分配率は増えない、「ワーキングプア」と呼ばれる人たちの増加。こんな現在の日本社会が抱える問題の根源を掘り下げたのが本書である。根源とは規制緩和や民営化を推進した市場重視の新自由主義思想であり、それが日本に波及した経緯とひきおこした現実の課題について学術的に説き明かした。各章では国内の金融、労働問題、社会保障、住宅、小売業、食料、環境といった分野別に、専門家が生活者の視点で課題を指摘している。内容は多くの国民が現実にかかわっている切実な問題が多いだけに、身近な生活の解説書としても読める。日本の生活・労働環境の変化を新自由主義改革の影響としてとらえ、解決しなければならない課題を浮き彫りにしている。

循環型社会の構築と農業経営



日本農業経営学会 編

責任編集 石田正昭ほか2名

農林統計協会 / 2007 361ページ 4,200円(税別)

自然と接し、自然の恵みを最大限に活用する農業経営も、実際には枯渇性資源に大きく依存した近代的技術を採用している。本書は、こうした現実のもとで、資源・エネルギー利用の節約や廃棄物最終処分量の減量をもたらすような環境負荷の小さい農業経営をいかに実現するか、という問題を技術と人間の両面から解明した学術書。国内外の農業経営や環境技術・環境問題の専門家たちが、有機性廃棄物の排出・再生・処理をめぐる地域レベルの取り組み、慣行農業の限界の克服をめざす経営実践の課題と展望、循環型社会の実現を可能にする経営行動と経営倫理、科学性・実践性・規範性を備えた農業経営研究のあり方などを議論している。日本農業経営学会3年間の学会シンポジウム報告と討議を一冊に集大成した院生必携書。

2008年1月～5月

三重大学の主な出来事

(三重大学広報誌「Flash News」より)

詳しい情報を知りたい方は、下記アドレスのページをご覧ください。
<http://www.mie-u.ac.jp/home/flash/index.html>

- 第55号 ●「記者と学長との懇談会」を開催
 - 「人材養成の目的を明確化した大学院教育改革」が文科省特別教育研究経費に採択
 - 「三重大学伊賀研究拠点の形成事業」が文科省の政策課題対応経費に採択
 - 「地域・職域との連携による保健医療支援事業」が文科省の政策課題対応経費に採択
 - 「業務改善活動推進グループ」を設置
 - 「アジア人財資金構想推進フォーラムin東海」に参加
 - タイ・タマサート大学とボリコムで調印式
 - 平成20年度キャンパス・インキュベータ入居企業決定
 - 「新春三重大学・三重TLO産学官講演会・交流会」を開催
 - 地域の知の拠点シンポジウム「今日からはじめる防災の取組」を開催
 - 「平成19年度業務改善活動報告会」を開催
- 第56号 ●「第2回産学官連携セミナー2007in伊賀」
 - 「知的財産活用シンポジウム～知的財産を活用できる人材の育成方法～」
 - 「第1回三重大学・鈴鹿医療科学大学連携協議会」を開催
 - 「合唱団」学長表彰
 - 「グレーター・ナゴヤ・イニシアティブ・ユビキタスセミナーin津2008」
 - 「附属小学校第34次公開研究会」を開催
 - 2007年度後期PBLセミナー発表会「PBLカフェ」(展示会「実践!学芸員への道」)を開催
 - 「三重大学アカデミックフェア2008」を開催
 - 「フィンランドの創造性教育」に関する講演会を開催
 - 「第2回フォーラムin一守田」を開催
- 第57号 ●「医学部附属病院の病棟・診療棟新営工事の安全祈願祭」を挙行
 - 大規模災害図上訓練を実施
 - 「情報化シンポジウム・イン・三重」を開催
 - 「三重大学PBL教育国際シンポジウム」を開催
 - 平成19年度産学連携「製造中核人材育成プログラム:技術者育成講座」報告
 - 四日市コンビナート産学官連携による「第2回三重大学講演会」を開催
 - 「第2回三重大学・和歌山大学連携協議会」を開催
 - 「国際交流セミナー」を開催
 - インターネット子ども交流
 - 「平成19年度三重大学教育GP成果報告会」を開催
 - 「個人情報保護に関する研修会」を開催
 - 「エネルギー環境教育成果報告会」を開催
 - 大学院生物資源学研究所長を選出
- 第58号 ●平成20年度入学式
 - 学長選考日程
 - 新「勢水丸」の起工式
 - 第1回三重大学教員免許状更新講習実施委員会
 - 新監事・学長補佐就任挨拶
 - 文部科学省の平成20年度「大学教育の国際化加速プログラム(海外先進教育研究実践支援[研究実践型])」に採択
 - 白衣授与式
 - 留学生のための図書寄贈へ感謝状贈呈
 - 国際キャリアアップ説明会
 - 第1回国際シンポジウム「近代社会化とコミュニケーションの技法—漢字文化圏の比較研究」
- 第59号 ●文部科学省の平成20年度「女性研究者支援モデル育成」に採択
 - 文部科学省の平成20年度「都市エリア産学官連携促進事業(発展型)」に採択
 - 医学部看護学科10周年記念式典
 - 大学別認証評価
 - 三重大学国際交流特別奨学生制度
 - 「放置自転車」を再利用
 - 「新自由主義改革と日本経済」を考えるシンポジウム
 - コラボ産学官三重支部「認証式」
 - 三重大学平成20年度「第1回地域貢献活動支援」
 - 「古紙再生利用化プロジェクト」成果報告会
 - 「インターンシップ説明会および事前研修会」

編集後記

法人化以降、大学にとって教育と研究に次ぐ第3の使命の社会連携が重要となっています。大学の姿も大きく変わっていくなか地域圏大学である本学では、特に地域との連携を重点項目として積極的に取り組んできました。本号では「地域とともに生きる」をテーマに野呂三重県知事と学長との対談を企画し、これまでの三重県と本学との連携状況や地域活動についてご意見を伺いました。本学の地域における活動の一端をご理解いただければ幸いです。





[発行]

三重大学広報委員会

三重大学総務部広報チーム
つしくりまちやちよ
〒514-8507 津市栗真町屋町 1577番地
TEL 059-231-9789 FAX 059-231-9623

[http://www.mie-u.ac.jp/
koho@ab.mie-u.ac.jp](http://www.mie-u.ac.jp/koho@ab.mie-u.ac.jp)

本誌掲載の文章・記事・写真等の
無断転載はお断りします。

印刷・製本 株式会社 三見社

